元喜寺

元善光寺の由来

元善光寺は、今から約一千四百年前第三十三代推古天皇十年に、本多善光卿によって開かれたという。

善光卿は麻績（おみ）の里の出で、国司に随って都に上り、ある時難波の堀江で一光三尊の如来にめぐりあい、これを背に負って故里に帰り臣を浄めて安置し奉った。これがこの寺の創りである。

臣はかくしゃくとして輝き、御座光の臣とよばれて今もこの寺の霊宝となっている。里を座光寺と称するのもこの縁によるものであろう。

四十一年を過ぎ、第三十五代皇極天皇二年、勅命によって本尊は芋井の里に遷された。今の長野善光寺がそこに始まる。この時同じ一光三尊仏を造ってこの地に留められ、寺は元善光寺とよばれるようになった。

善光寺の名は本多善光卿の名に基き、元善光寺の元は本元の意で、古来善光寺に参詣するだけでは片参りになると言い伝えられた。

この寺の由緒の深さをもの語るものといえよう。

昭和四十五年十月　飯田観光協会

一度詣れよ 元善光寺 善光寺だけでは 片詣り

御本尊 一光三尊阿弥陀如来様 御影

御縁起

お釈迦様のご在世当時、天竺国（現在のインド）の月蓋（がっかい）長者の願いによって此の世に出現された阿弥陀如来様は、今からおよそ千四百年前、欽明天皇の御代に百済国から日本へ渡ってこられました。

しかし物部氏と蘇我氏の争いの後、物部氏によって難波の堀に沈められてしまいました。

その後、推古天皇十年に信州麻績（おみ）の里（現在の飯田市座光寺）の住人本多善光（ほんだよしみつ）公が、国司の供をして都に上った時に、難波の堀にて阿弥陀如来様にめぐりあい生まれ故郷へお連れし、お祀りしたのが元善光寺の起源です。

その後阿弥陀如来様の御告げにより芋井の里（現在の長野市）に阿弥陀如来様を御遷しすることになった時、再び御告げがあって「毎月半ば十五日間は必ずこの麻績の古里に帰り来て衆生を化益（けやく）せん」との御誓願を残されました。

善光公は山中にて授かった霊木をもとにして自ら一刀三礼の上、御本尊様と同じ大きさの御尊像を彫られたのが元善光寺の御本尊様となりました。

そもそも善光寺の名は善光公の名を以って付けられたものです。

御詠歌「月半ば毎に来ますん弥陀如来、誓いぞ残る麻績の古里」とある様に、古来長野の善光寺と、こちら飯田の元善光寺と両方お詣りしなければ片詣りと云われております。

座光の臼

御涅槃像

お戒壇巡り

御本堂外陣より、履物を履いたままでお戒壇巡りをお参りいただけます。

お戒壇巡りとは、仏様の胎内巡りともいい、暗闇の中を手すりをたどって進み、御本尊様の真下に位置する極楽往生・開運の錠前（仏具の独鈷型）に触れていただくことで仏様とより深いご縁を結んでいただくものになります。元善光寺のお戒壇巡りは無料でお参りいただけます。

宝物殿

元善光寺には数々の宝物が残っております。宝物殿には霊宝座光の臼ほか御涅槃像、鬼瓦の前身と言われる木彫りの鬼面、藤原時代の愛染明王像、その他仏像、掛軸等百二十点余が展示、公開されております。

座光の臼の由来

今から千四百年前、長野市の善光寺の出来る前に善光公が御本尊を難波の堀より迎えてお祀りするとき、この臼の上に安置して供養せられること四十一年間。後にこの臼から光明が輝いていたのでこれを座光の臼（台座が光ったの意）といい、元善光寺の霊宝であります。

御涅槃像（おねはんぞう）

御釈迦様が亡くなられた事を涅槃に入られたと申します。その時の御姿を表したのがこの涅槃像であります。当山には二体あり、一体は飯田市の文化財の指定を受けております。

平和の鐘

この鐘は戦時中供出の後、昭和二十五年四月平和を祈念するために当時の衆議院議長、大臣各位の協賛によって再鋳奉献せられたもので、銘を善光寺貫主清水谷大僧正に、「平和の鐘」の揮毫は元久迩宮朝融王殿下の筆になるものであります。

鐘の目方は三五〇貫（１３１２キログラム）。

平和殿

間口十二間、奥行七間半の建物で、西国三十三番の札所の御観音様をお祀りしており、西国三十三番の霊場お砂踏み参拝が出来ます。

宝物殿

平和殿 外観

平和殿 内部（お砂踏み）

よし乃亭３１５号室より中央アルプスを望む

天竜水神温泉　花薫る宿　よし乃亭

JOYSOUND

ツアー参加者２２名

南アルプスを望む
中央アルプスを望む
養命酒 駒ヶ根工場見学